



てきすとぽい杯

VOL

1



www.text-poi.net

目次

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

第一回 募集要項

第一回 審査結果

入賞作品紹介

《大賞》

「侵略のポップコーン」 進常 椀富 獲得☆ 3.778

《入賞》

「ポップコーン・オア・アライブ」 代々木犬助 獲得☆ 3.706

「ぼくの初夢」 丁史ういな 獲得☆ 3.667

「初夢頬袋」 碧 獲得☆ 3.500

〈候補作品〉 ※得票順

「キャラメルポップコーン」 山田佳江 獲得☆ 3.471

「内角の和」 茶屋 獲得☆ 3.450

「初夢ポップコーンの振動」 ヘリベマルヲ 獲得☆ 3.353

「れみんぐペンギンず」 犬子蓮木 獲得☆ 3.263

「一・富士、二・鷹、三・ポップコーン」 司令@ヴァロ姐 獲得☆ 3.222

〈お題の使い方が素晴らしかったで賞〉

「スパイ」 工藤伸一@ワサラー団 獲得☆ 3.188

「おれはホモじゃない」 忌川タツヤ 獲得☆ 3.125

「夢は空高くに」 ジュニー 獲得☆ 3.125

「キャラメル味」 ウツミ 獲得☆ 3.125

「劇団」 たきてあまひか 獲得☆ 2.812

「ふわふわポコーン♪」 やぐちけいこ 獲得☆ 2.706

〈投稿一番乗りだったで賞〉

「大好きなのはあなたとユメと」 ひやとい 獲得☆ 2.688

「無題」 ひこ・ひこたろう 獲得☆ 2.429

〈番外作品〉 ※投稿順

〈無冠の帝王で賞〉

「ポップコーン・レッド」 雨森 獲得☆ 4.389 (お題「初夢」が不足)

「Timeout」 takadanobuyuki 獲得☆ 3.091 (制限時間後に投稿)

〈同じお題を用いた作品〉

[同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介](#)

終わりに

[終わりに](#)

奥付



「てきすとぼい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぼいは、2012年2月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013年1月よりてきすとぼい主催の競作イベント「てきすとぼい杯」を開始いたしました。



「てきすとぼい杯」とは

競うからこそ、生み出されるものがある。

わずか一時間だからこそ、生み出されるものがある。

てきすとぼい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第一回てきすとぼい杯

会場 : <http://text-poi.net/vote/5/>

お題 : 三題「振動」「初夢」「ポップコーン」

これらの言葉を、タイトルまたは本文で使用してください。

投稿期間 : 2013年1月19日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013年1月20日 0:00 ~ 2013年1月27日 24:00

第一回は、初回であったにもかかわらず、19もの個性的な作品をお寄せいただきました。

第一回募集要項

【投稿について】

投稿期間：

1月19日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間 1 時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/5/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲&投稿してください。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

【審査について】

審査期間：

1月20日（日）0時 ～ 1月27日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

第一回審査結果

【審査結果】 ※得票順

(番外) ☆ 4.389

「ポップコーン・レッド」 雨森

<http://text-poi.net/vote/5/17/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:43

1位 ☆ 3.778

「侵略のポップコーン」 進常 椀富

<http://text-poi.net/vote/5/5/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:21

2位 ☆ 3.706

「ポップコーン・オア・アライブ」 代々木犬助

<http://text-poi.net/vote/5/9/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:29 最終更新: 2013.01.20 16:39

3位 ☆ 3.667

「ぼくの初夢」 丁史ういな

<http://text-poi.net/vote/5/15/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:38 最終更新: 2013.01.19 23:43

4位 ☆ 3.500

「初夢頬袋」 碧

<http://text-poi.net/vote/5/11/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:30 最終更新: 2013.01.19 23:43

5位 ☆ 3.471

「キャラメルポップコーン」 山田佳江

<http://text-poi.net/vote/5/13/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:34

6位 ☆ 3.450

「内角の和」 茶屋

<http://text-poi.net/vote/5/3/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:14

7位 ☆ 3.353

「初夢ポップコーンの振動」 ヘリベマルヲ

<http://text-poi.net/vote/5/6/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:25 最終更新: 2013.01.19 23:35

8位 ☆ 3.263

「れみんぐペンギンず」 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/5/7/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:26

9位 ☆ 3.222

「一・富士、二・鷹、三・ポップコーン」 司令@ヴァロ姐

<http://text-poi.net/vote/5/2/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:05

10位 ☆ 3.188

「スパイ」 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/5/16/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:41

11位 ☆ 3.125

「おれはホモじゃない」 忌川タツヤ

<http://text-poi.net/vote/5/8/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:27 最終更新: 2013.01.19 23:44

12位 ☆ 3.125

「夢は空高くに」 ジュニー

<http://text-poi.net/vote/5/14/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:35

13位 ☆ 3.125

「キャラメル味」 ウツミ

<http://text-poi.net/vote/5/12/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:32 最終更新: 2013.01.19 23:47

(番外) ☆ 3.091

「Timeout」 takadanobuyuki

<http://text-poi.net/vote/5/19/>

投稿時刻: 2013.01.20 01:34 最終更新: 2013.01.20 02:44

14位 ☆ 2.812

「劇団」 たきてあまひか

<http://text-poi.net/vote/5/10/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:29 最終更新: 2013.01.19 23:44

15位 ☆ 2.706

「ふわふわポコーン♪」 やぐちけいこ

<http://text-poi.net/vote/5/4/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:17

16位 ☆ 2.688

「大好きなのはあなたとユメと」 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/5/1/>

投稿時刻: 2013.01.19 22:53 最終更新: 2013.01.19 22:54

17位 ☆ 2.429

「無題」 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/5/18/>

投稿時刻: 2013.01.19 23:45

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/5/>

《大賞 1 作品》

獲得☆ 3.778

「侵略のポップコーン」 進常 椀富

<http://text-poi.net/vote/5/5/>

冒頭から著者登場……と思えば、その後の展開に次ぐ展開に次ぐ展開。

たった一時間で見事にまとめきり、さらに余韻まで残す、まさに第一回の大賞に相応しい作品でした。おめでとうございます！

《入賞 3 作品》

獲得☆ 3.706

「ポップコーン・オア・アライブ」 代々木犬助

<http://text-poi.net/vote/5/9/>

……ポップコーンとは、一体何なのか？

思わせぶりに始まって、じわじわと加速、加速、その勢いのままラストへ。非常に完成度の高いショートショートでした。

獲得☆ 3.667

「ぼくの初夢」 丁史ういな

<http://text-poi.net/vote/5/15/>

ヒトと、ぼくと、ママと、街の景色と。

薄暗い色彩感を持った、とても雰囲気のあるSF作品。終わり方に賛否ありましたが、高い評価を獲得しました。

獲得☆ 3.500

「初夢頼袋」 碧

<http://text-poi.net/vote/5/11/>

恋と友人、地方と東京、後ろめたさと正直さ。
ハムスターに気付かされる、決して綺麗事ばかりではない
若い女性の心理を丁寧に描いた、リアリティを感じる作品でした。

《特別賞》

《投稿一番乗りだったで賞》

「大好きなのはあなたとユメと」 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/5/1/>

お題発表後わずか 23 分という驚きの速さで投稿されました。

《お題の使い方が素晴らしかったで賞》

「スパイ」 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/5/16/>

お題のこの登場のさせ方は、恐らく誰も想像していなかったのでは。

《無冠の帝王で賞》

「ポップコーン・レッド」 雨森

<http://text-poi.net/vote/5/17/>

お題の不足で集計対象外となりましたが、獲得☆票では飛び抜けていました。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！
素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)

《大賞受賞作品》
侵略のポップコーン
進常 椀富

「宇宙からの侵略だよ、連人くん！」

また隣の進常さんだ。進常さんはいつものように、庭に面した窓を開けて勝手に入ってくる。冴えない独身中年のおじさんで、小説家を目指してる公務員だ。僕が学生で一人暮らしなのをいいことに、しょっちゅう妄想を聞かせにやってくるんだ。僕は呆れながら聞いた。

「進常さん、今度はどんな設定なんですか？ もう飽き飽きですよ、宇宙人は」

「違うんだよ、連人くん！ ほら空を見ろよ！」

進常さんは血走った目で、僕を外へ引っ張り出す。

「ほら、あそこ！」

進常さんの指さした空を見て僕は仰天した。UFOの群れだ！ 十機くらいのUFOがこちらを目指して飛んでくる！

進常さん目をぎらぎらさせて続けた。

そのとき、僕の秘められた力が目覚めていくのを感じた。

「う、う、うあああああああっ！」

額に第三の目が開く。

「超殺戮！ 虐殺殲滅根絶やしこうせええええーんっ！」

僕は叫びとともに額からビームを出し、空を飛ぶUFOをすべて撃墜した。

地球に再び平和が訪れる……。

「そんな初夢を見ました」

僕は例のごとく、勝手に家へ上がり込んで、勝手にインスタントコーヒーを飲んでる進常さんに話した。ちょっと得意な気分で。

「どうです、進常さん？ 面白いでしょ？ 小説に使ってもいいですよ？」

「つまんないよ、別に。連人くんはまだまだ素人だね」

進常さんの答えはつれない。

僕はくちびるを尖らせる。

「それは進常さんのセンスがずれてるんですよ」

「そうかなー……」

そう首をひねった進常さんの身体が、突然激しく震え始めた。

「あがががががが！」

「進常さん、どうしたんですか！」

進常さんの身体があっという間に激しく振動した。

かと思うと、軽い音を立てて頭が弾ける。頭の中身が白いポップコーンのようなものになり散らばった。

進常さんの身体が椅子から崩れ落ちるとともに、少女の声が聞こえた。

「やはり、地球人の中には侮れない者がいる」

進常さんが背中を向けていたリビングへの入り口に、銀髪の少女が立っていた。身体にぴったりしたスーツを着て、手にはレトロなデザインの銃を握っていた。

僕は驚き戸惑いつつ誰何した。

「お、おまえは何者だ！」

「深宇宙赤色製菓連盟、ポップコルニア。地球人類を全宇宙の食卓に提供するためやってきた」

「そ、そんなことが信じられるか！」

少女は妖しく微笑んだ。

「フッフ、おまえのような特異能力者はとびきり高値のお菓子にしてやろう！」

少女が銃を僕に向ける。

そのとき、僕の秘められた力が目覚めた。額に第三の眼が開く。

「超防衛！ 地球外生命体全裸こうせえええーん！」

僕は叫びとともに、額からビームを出した。

ビームは少女を包み込み、その服だけを溶かす。少女はあっという間に全裸になった。

「いやーん、地球人のえっちいー！ 銀河連邦に訴えてやるからあーっ！」

少女は胸と股間を隠しながら、天井を突き破って空に消えた。

地球に再び平和が訪れる。

「と、こんな話を書いてみた。今度こそ受賞間違いなし！」

進常さんは、僕の目の前で得意げな顔でタバコをふかす。

例のごとく勝手に部屋へ上がり込んできて、「新作ができたんだよ！」と、僕に無理やり小説を読ませたのだ。

新年早々頑張ってるのは、僕も認める。

でも、同時にこうも思う。

進常さんが小説家になれる日は遠い……、と。

そのとき、僕の背後から少女の声が聞こえた。

「やはり、地球人の中には侮れない者がいる……！」

おわり

投稿時刻 : 2013.01.19 23:29

最終更新 : 2013.01.20 16:39

獲得☆ 3.706

《入賞作品》
ポップコーン・オア・アライブ
代々木犬助

「お客さん、ポップコーンってありますよね。あれを最後に口にしたいのっていつですか？」

タクシーの後部座席にいて、いまや臍の緒のように形骸化してしまった備え付けの灰皿を恨めしそうに見つめていた僕は、運転手の唐突な質問に「失礼？」と聞き返した。

「だからポップコーンですよ。誰も聞いちゃいない車内ですがね、何度も口にしたいような言葉じゃないんですから。よろしくお願いしますよ」

僕はますます混乱する頭で、それでもなんとか記憶のインデックスを探り、高校生のときに映画館で、と答えた。

「ふえ～！そりゃ大したもんですよ。お客さん、だいぶ若く見えるけどいくつですか。え？ 32？まさか。そりゃどこの映画館ですか」

どこの映画館にだってポップコーンくらい置いてますよと答えたついでに、僕はディズニーランドを歩き回る子どもがポップコーンをぎっしり詰め込んだ透明なバケツのようなものを首からさげて歩いている滑稽さを笑った。なぜ滑稽かといって、あれは一日ずっと外を歩き回る子どもにとっての追加の胃袋だから。なんという機能的なシステムだ。

「馬鹿な！ディズニーランドなんてとんとご無沙汰ですがね、ポップコーンをかじりながら遊んでるだなんて聞いたことがない」

いや普通ですよという、運転手は卒倒しそうな声を出して、その後、小さな声でぽそつと言った。我々が若い頃はね、こっそりとやったもんですよ、と。

「私はね、いまでも夢に見るんですよ。夜勤明けの1月2日に見たものだからあれを初夢と呼んでいいものかわからないけど、ポップコーンをじゃんじゃんやってね、男も女も、ネクラもブサイクもメンヘラも、そのときばかりはみんな恍惚と幸せそうな顔してね」

僕はふたたび「失礼？」と聞き返さなければならなかった。それはもしかして……

「でもね、私はもういいんです。お客さんみたいな人が映画館でやってたって、若い子どもが白昼堂々とテーマパークでなにしてたって。うらやましくなんかいいですよ。むしろね、憐れんでるんですよ。あなた、タクシーの運転手に憐れまれるなんて想像したこともなかったでしょ」

僕は訳がわからなくなって、鎌をかけて出まかせを言うことにした。運転手さん、実はいま持ってきてるんですよ。ポッ……

「言わないで！あなたは本当に不道德な人だ。淫らですよ」

失礼な言葉にいらだった僕は、だいたいにしてあなたがこの話を振ったんですからねわかってますか？と噛みついた。ポップコーンだなんていやらしい言葉、よく初対面の人に口にできましたね。その神経が信じられない。恥を知りなさい。ポップコーン！ポップコーン！！ポップコーン！！！！

「わー！やめなさい。やめなさいったら」

僕と運転手はその後しばらく、無言で過ごした。
僕は正直、訳のわからない話から解放されてほっとしていた。

でも、ここはどこだ？
でこぼこと振動する山道。僕が伝えた行き先は、郊外のなんの変哲もない団地だったはずだ。

タクシーが、山肌に沿った細いカーブに差し掛かったとき、運転手が僕に聞いた。

「さっきは取り乱したりして失礼しました。ところで、いまお持ちだというポッ……ちょっとわけていただけませんか？」

わはは。なんだかんだで未練たらたらじゃないですか。そうって笑った僕は、ポップコーンをもってるだなんて嘘ですよと白状した。いやー、ごめんごめん。

――数瞬の沈黙のあと、運転手がハンドルを切った。崖のほうに。

おい馬鹿たれクソッたれ！
ポップコーンってなんなんだよ。
それだけ教えてから死ぬ！

いや死ぬな。っていうか死んじゃうよこれ。

ポーン！

投稿時刻 : 2013.01.19 23:38

最終更新 : 2013.01.19 23:43

獲得☆ 3.667

《入賞作品》
ぼくの初夢
丁史ういな

ママと街を歩いていると、隅にうずくまった、こどものヒトを見つけた。うすぎたないけれど、頭から生えている長い毛が黒くて、好きになった。

「ママ、あれヒトだよ」

だけれどママは、ぼくの指先をまるで見えないみたいに無視して、「今日のごはんはなにがいい？」と言ってきた。その顔が嫌なくらい静かだったから、ぼくはもう一度、「ヒトなんだよ」と言った。

「そんなもの気にしてはいけません！」

ふいに声が飛びかかってきて、頬が痛くなった。ママの顔がよく分からない。見えるものすべてがぼやけて、ふやけて、分からなくなったんだ。

そのあとすぐに、「ごめんね」ってママは謝って、ぼくの頬を撫でて抱きしめてくれた。じんわりと体の奥からあたたかいものが浮かび出てきて、ぼくは、泣くのをやめた。

「もう、ヒトのことなんて話さないでね。分かった？」

「うん」

泣きやんだら街の景色がよみがえった。近くにいたのはぼくとママとあのヒトだけで、だからママは、あんな大声を出せたのだと分かった。傍に誰かいたなら、ママはいつも、静かにしなさいって言うから。

おうちに帰ると、知らないおじさんがいた。ものものしい表情をしていて、なにかの本を読み込んでいるようだった。

ママが挨拶をしたので、ぼくも「こんにちは」と倣った。

「お医者さんの先生よ」とママは柔らかい声で教えてくれた。お医者さんは、本を隅っこに片付けて、「どうぞよろしく」と答えた。怖そうな顔をしているけれど、声はやさしそうだ。ぼくがもう一度「こんにちは」と言うと、お医者さんは少しだけ笑って、「こんにちは」と返してくれた。

「先生、今日はよろしくお願ひします」

ママの言葉に頷いて、お医者さんは、「おいで」とだけ言って、ぼくを居間につれてきた。居間はいつの間にか作りかえられていて、かたそうなベッドひとつと、たくさんの難しい機械が置かれていた。

ぼくはママに、「なにををするの？」と訊いた。きっとこれは、ぼくのことだ。これからぼくになにかあるんだ。そう直感したからだ。

「これからね、あなたはみんなと同じになるのよ」

だけれどママの言葉はよく分からなくて、ぼくは困ってしまった。

「心配することはない」お医者さんが口を挟んだ。「少しも痛くない。きみはここで眠って、夢を見るだけでいいのだよ」

夢？ それはなに？……ぼくは口に出して質問しようとしたけれど、ママの顔を見て、やめることにした。ママも、お医者さんも、この居間も、不思議なくらいに静かで、その静けさを壊したくないと思った。「さあ、そこのベッドに横になりなさい」

お医者さんが言った。お医者さんがなにか長いものを持っていたので、ぼくは急に怖くなった。それでちょっと動けずにいると、「大丈夫よ」と、ママの声が聞こえて、すぐにあたたかくなった。

ぼくがベッドに横たわると、お医者さんは頷いて、その長いものをぼくの頭にくっつけた。途端に、眠たくなった。

ぼくの頭が振動した。手に持っていたポップコーンがいくつか箱からこぼれた。ポップコーンがひとつこぼれ落ちるごとに、ぼくの頭の中から、あたたかいものが、消えてゆく感じがした。ぼくは怖かった。

ここはママとよく歩く、あの街だった。だけれど、いつもと違って、空が青かった。ぼくはその不気味な色を眺めて、もっと怖くなった。頭が震えた。ポップコーンがこぼれる。

ヒトがすぐ傍にいたことに、ぼくは気づいた。そのヒトは、こどもで、痩せていて、髪が黒かった。なんだか親しみをその黒色に感じた。ヒトは、地面に落ちたポップコーンを、かき集めて食べていた。それを見て、きたない、と体の奥から思った。

ぼくの頭が振動する。揺れるごとに、箱の中身は少なくなって、ぼくはどんどん冷たくなった。ふと空を仰ぐと、だんだんもとの色に戻っているのが分かった。もともとの、黒色に。

ヒトの体が薄れてゆく。透けて見えた。ぼくはそれを、つまらない、と思って、すぐに見るのをやめた。ポップコーンがこぼれてゆく。

空が、真っ黒になった。

「おはよう」

目覚めると目の前にお医者さんがいて、ママもいた。ふたりとも朗らかな表情をしていて、ぼくはなんだか嬉しくなった。

「おめでとう。息子さんはこれで、我々の仲間入りです」

「ああ、ありがとうございます、先生」

ふたりの会話を聞きながら、ぼくは、夢のことを思い出していた。生まれて初めて見た夢。あのポップコーンはなんだったのだろうと思い、お医者さんに試しに訊いてみた。するとお医者さんは簡単に、「それはきっと、ヒトの因子だろう」と答えてくれた。ぼくは脳内に指令を与えてネットワークに接続し、「因子」の意味を検索した。すぐに理解して、「ありがとうございます」とお医者さんに言った。ママはその様子を見て、大袈裟に喜んでいた。

ぼくは今日から、アンドロイドだ。

投稿時刻 : 2013.01.19 23:30

最終更新 : 2013.01.19 23:43

獲得☆ 3.500

《入賞作品》
初夢頼袋
碧

机の上に置いていた携帯がメールを受信した、マナーモードになっていたから、大きな振動音がリビングに鳴り響く。慌てて手に取ると、送信者欄に『沢村加奈子』の名前が表示されていた。

『0時に送るとすぐに届かなそうだから、先に送ります。今年もお世話になりました。来年もよろしくね！

Happy New Year!!』

笑顔の絵文字が末尾に添えられている。去年も同じようなメールが来ていたなあ、と思う。東京の大学に通う加奈子は、去年から正月に帰省しなくなった。

紅白歌合戦は、私の興味のない演歌歌手の出番が続いている。黙って歌を聴いている両親と弟を置いて、私は自分の部屋に駆け込み、博史に電話をかける。

「もしもし？ どうした？」

のんびりした声が聞こえてくる。低くて掠れた声は、電話越しでも甘くて、ああ、私はこの人が好きなんだな、と思う。

「声が聞きたくなった」

「なんだよ、それ」

笑っている博史の声はどこまでも朗らかで。ああ、この人を放したくない、と思う。私は枕元に置いていた、ミッキーのぬいぐるみを抱きしめながら、携帯から聞こえてくる声に耳を傾ける。ミッキーは、去年の誕生日、付き合って初めての私の誕生日に、博史がプレゼントしてくれた。やわらかいぬいぐるみは抱き心地がいい。

加奈子が悪いのだ。私だったらこの人をどうやってでも手に入れておきたいと思うのに。

「初詣、一緒に行こうね」

「すぎるように言うと、

「ああ、約束しただろ。9時に迎えに行くから」

「約束だよ、約束だよ」

「どうしたんだよ、当たり前だろ？」

「うん」

私たちはそれから、他愛もないおしゃべりを電話越しに続けた。博史はずっと私の電話に付き合ってくれる。ああ、博史は私のもの。私の言葉しか聞いていない……

急に安心感を覚えた私は、だんだんと頭が重くなってくるのを感じた。まだ夜の11時。いつもならこんな時間に眠くなったりはしないのに、どうして。

だんだんと相槌を打つのが辛くなってきて、気付いたら、私は夢の中にいた。

私は小さなケージの中で、ひたすら回し車を回している。かたかたかたという音が鳴り響いている。

ああ、昔、ハムスターを飼っていたな、と思った。いつまでも回し車を回していたり、餌をやれば全部頬

袋につめてパンパンにしてしまう、おばかなペット。

私は回し車を降りた。おがくずの絨毯はふかふかしていて気持ちいい。自分専用のケージかと思ったら、回し車から降りた私に、もう一匹のジャンガリアン・ハムスターが歩み寄ってきた。この子がジャンガリアンなら、私もジャンガリアンなのかな、と思う。

「回し車の順番を待っていたの？」

と聞いたら、その子は

「ううん。ごちそうが手に入ったから、おすそ分けにきたんだよ」

と言った。

手渡されたのは、一粒の茶色いポップコーンだった。

「大きいね」

「うん、大きいでしょ。だから、頬袋に入れる前に少しだけ噛み砕かないとだめだよ」

言われるままに、私はそれをかじってみた。

それは、キャラメルポップコーンだった。表面は甘いのに、中は随分と塩辛くて、私は腰を抜かした。

「外側が甘いのに、中がしょっぱいよ！」

「うん、そうだよ。でも、甘いのも、しょっぱいのも、生きていくのに必要だよね」

私はそのとき、その声は、どこかで聞いたことがあるな、と思ったけれど、そう思った瞬間に、目が覚めていた。

なんとなく、後味の悪い夢だった。

「あけましておめでとう」

「おめでとう」

迎えに来てくれた博史と、手を繋いで近所の神社まで歩いていった。雪は降っていなかったけど、今年の正月は随分と寒かった。手を繋いで肩を寄せ合えば寒くない。そう思って、できるだけ体をひつつけた。

博史と初詣に出かけるのは、これで6年目だ。博史は、高校2年生の時の同級生で、加奈子もそうで、ふたりは小学校からの同級生だったから、私が出会う前から既に随分と仲がよくて、私がそこに加わって、それから3年間、毎年3人で初詣をするのが習慣だった。

魔が差したのだ。地元の学校に進学した私と博史。東京の大学に進学して、なんだか垢抜けて帰ってきってしまった加奈子。私は冬休みに帰省してきた加奈子が妙に綺麗になっているように見えて、突然、今まで覚えたことのない焦燥感と嫉妬心を抱き、そして、初詣に着物を着てきたいと言った加奈子と、博史を、引き合わせたくないと思ってしまった。

加奈子、今年は帰ってこないんだって。そう嘘をついて、まんまと騙された博史と二人きりでいった初詣。初めての二人デートに、このまま押せば、私を選んでくれるかもしれないと予感し、そして私はその年の1月中に、博史とめでたく彼氏彼女になることができた。

おかしい嘘で初詣の約束をドタキャンされた挙句、突然二人の交際宣言を聞かされた加奈子が、何をどこまで悟っているのかはわからない。ただ、加奈子は実際、私によそよそしい連絡しかよこさなくなり、博史に至っては、何の連絡もしないらしい。

「ねえ」

「ん？」

「好きだよ」

そう言って博史の腕をきつく抱くと、博史は何も知らずに穏やかに笑う。

甘いのもしょっぱいのも必要だよというハムスターの声がこだまする。

キャラメルポップコーン

山田佳江

僕がロビーに戻ってきて、彼女は目を伏せたまま黙っていた。

「ポップコーンとアイ스티ーで良かったんだよね？」

「そんな気分じゃなくなった」

「え？」

カウンターテーブルにトレイを置いて、僕は彼女の顔を覗きこむ。

「だからそんな気分じゃなくなったの」

彼女はテーブルに二枚のチケットを置き、

「さよなら」

と言ってその場を立ち去った。

なにがおこったのか、しばらくの間理解できなかった。シネコンを出て行く彼女の背中をぼんやりと見送って、それからようやく『追いかけるべきだ』ということに気づく。僕はロビーのテーブルにポップコーンとドリンクを置いたまま、チケットを持ち走ってシネコンを出て行く。

ショッピングモール内のどこを探しても、彼女の姿は見当たらなかった。当然電話にも出ない。しわくちゃになったチケットと携帯電話の時計を見比べる。映画はすでに始まっている時間だ。

チケットの払い戻しができないか窓口で尋ねてみる。とても申し訳なさそうに、かつ事務的に申し出は拒否される。

ロビーのカウンターテーブルに、ポップコーンとドリンクは置かれたままだった。紙のカップは水滴で覆われている。僕は乱暴にトレイを持ち上げ、チケットのうちの1枚を使って上映室に入る。

ただでさえ薄いのに、氷が溶けてさらに薄くなってしまったアイ스티ーを飲みながら僕は考える。腹が立たないこともない。しかしそれよりも疑問の方が強い。なぜ、彼女は怒ってしまったのか。

漫画が原作だとかいう邦画は面白くもなんともなくて、僕は彼女との記憶を辿る。僕はなにをしたのだろう。シネコンの悪口を言ったのが原因だろうか。ドルビーサラウンドなんかより、古い映画館の振動すら伝わってくるスピーカーが云々。それは確かにつまらない話かも知れない。だけど楽しみにしていた映画を拒否するほどのことでもない。

『あと 10 分よ』

主演女優がなにやら緊迫している。僕はしぶしぶポップコーンに手をつける。

「あれ？」

思わず声が漏れる。生まれてはじめて食べるキャラメルポップコーンは、想像していたよりもずっとおいしかった。ポップコーンが甘いなんてありえないと思っていた。彼女の希望により買ったキャラメルポップコーン。僕は食べないつもりでいたのに。

さくさくとキャラメルポップコーンを食べ続ける。2つ目のアイ스티ーに手をつける。なるほどコーラにしなくて良かった。彼女は正しかったと僕は思う。

彼女は正しかった。シネコンの映画館だってそう悪くもない。

『だけど初夢は？』

『初夢の使いどころを、見誤ってしまった』

キャラメルポップコーンに夢中になっているうちに、映画は随分と進んでしまっていた。彼らがなんの話をしているのかさっぱりわからない。わからなくてもいいや、と僕は思う。

彼女ともう二度と会うことはないのかも知れない。それならそれでいい。

僕は最後のキャラメルポップコーンを口に放り込んだ。

内角の和

茶屋

三角形の内角の和は 180° である。

ただしそれはユークリッド幾何学での話で、非ユークリッド幾何学の中では 180° を超えちゃったりする。

球面の上に書かれた三角形の内角は 180° を超えてしまったりする。

もちろん、曲率が負の数値であったりすれば、 180° を下回ったりする。

それはそんな物語だったのかもしれないし、そんなふうではない物語なのかもしれない。

そもそも物語ではなかったかもしれないし、そもそもそんなものは存在しなかったかも知れず、結局のところ三角形の内角の和なんて知ったこっちゃないのさ。

腹が減って目を覚ます。

目を覚ましたかと思えば次の瞬間には冷蔵庫の前にいる。その間の記憶はなくて、おそらく酒がまだ残っているのだろう。

正月の夜からぶっ通しで酒を飲み続け、次々と脱落していく地元の仲間達を横目に見やりながら、俺は最期の勝利の美酒を味わった直後に嘔吐し、曖昧な認識の中で布団らしきものの中に潜り込んだのだ。

今は何日であるのか。もはや途中からの記憶はポップコーンのようにはじけ飛んで、ただただ笑いながら酒をかつ食らっていた。何度も同じ話をして、何度も同じ話に笑い、何度も同じ話をして、何度も同じ話に笑いと言った調子で朝日が登るのを何度か見て、初夢を見ぬまま今日までやってきてしまった。とすればさっきの夢が初夢なんだろうとも思うのだがてんで夢の内容なんぞは覚えておらず、きっと鷹と茄子の遺伝子を合体した富士山のような化物がでてきて扇でも仰いでいたんだろうよと嘯きながら冷蔵庫の中を漁るのであった。

冷蔵庫の中はと言えば漁るほどのものもなく、梅干しとお茶と哀愁のある貧困と賞味期限の切れた夢が詰まっていたりした。

幸いにも冷蔵庫の上にはカップヌードルが乗っていて（いつも食うやつより 50 円ほど高級品）、そいつを腹に納めることに決めたわけだ。

電気ポットにお湯を入れて、お湯を湧かしている間にベッドの上を見ながら呆然として、はたまた思案し、とりあえずスープのもとを入れて、また思案する。

ベッドの上には知らない女が寝ていた。

ならばまだいい。

ベッドの上に寝ていたのは俺だった。

「ゆーたいりだつー」

カップヌードルを腹に収めた俺は昔はやった一発ギャグをとりあえずやってみる。

うん。やっぱり面白く無い。

さてこの状況はどうしたもんかな。とりあえずカップラーメンは食べたわけだし幽体ってわけじゃないんだらう。

いやいやまだ決めつけちゃイカンだろ。幽体がものを食べんなんぞ世間の勝手なイメージであって、「実は食えましたテヘッ」なんつー世界で初の実証結果にならんとも限らん。いやいやそもそも幽体離脱なんてのは脳みその側頭葉と後頭葉だかの境にある身体感覚を司る部位が腫瘍云々で損傷、障害を受けた場合に発生する幻覚的な感覚に過ぎないのだ。

じゃあこりゃなんだよ。

おかしいだろ。

つーこたあこりゃ夢かい。

とんだ初夢かい。

もしかして夢オチかい？

とまっていると突然肩を叩かれた。

振り返れば奴がいた。奴っての俺で、俺ってのは奴で。

「ふーえーてーるー」

「Yes」

酔っ払って幻覚でも見とるんやろか。やーべーやーべーマジやーべーとりあえず寝るかよおい。とか言ってるそばからベッドには2人の俺が寝ていて、こたつでは俺が蜜柑を剥いていて、蜜柑あったのかよちくしょーカップヌードルは寝起きにはちょっと重かったぜ！

そんなこんなで「ドキッ！俺だけの大家族スペシャル」状態で今日に至るわけだが、現行の法律では現状の俺の状態をどうすることもできず政府のお偉いさん方も俺たちを囲んで会議を連日繰り返すものの俺が増えるたびにその呼称を決めるのに難儀し、そもそもこの問題に対する対策室の命名が蒸し返され、いつ間にやら担当者が変わり、事務局の古株は頭がポップコーンみたいに弾けちまったわけで、仕事のない左遷部署に飛ばされちまった。

さてさてそんな訳で俺は、俺達は今日も生きてる。俺達はその後増え続けてしまって、俺の住んでいる市の1%ぐらいの人口比率を占めてしまっていたりする。んでもって俺の行動パターンはどうしても似てくるってわけだから一緒の道と一緒に大行進する現象が度々見られるわけだ。まるでニュースで見るなんかの生き物の大量発生って感じで、俺達が一歩進むたび大地は揺れて、振動が伝わってガラス窓が割れるような大惨事。なんてったって俺だけの軍隊。シンクロ具合はばっちりだ。

さてさて俺達の状態は続く。日本国の食料不足と酒不足は俺達が根本的原因で、ウォーリーを探せならぬ俺以外を探せ状態。

まーさすがにそんな状態になれば政府も重い重い重くて重くてメガトン級の腰をあげざるを得ないわけである特例法案を可決した。

名付けて俺一人法案。

俺の組織票によって俺党の議員を議会に送り込んでいたにもかかわらず、まだまだ力及ばずだったよ。

んでもってバトルロワイヤルが始まった。

さすがに殺し合いの環境になると俺達も同調しなくなる。俺のある意味での自殺は何度も何度も繰り返されてピーク時の半分になったものの、その後が大変だ。俺達は減るけれども、その一方で増え続けるわけ

だ。減少速度と増加速度が平衡に達した時、それ以上数は増えもせず、減りもしなかった。生き残った俺達は合意のもとで新参者を即時瞬殺する部隊を編成し持ち回り制で動員し始めた。

だが、気の変った俺もいるわけで、新規増殖者たちを匿う勢力が現れた。

ま一つまり、俺同士の戦争が始まった。

そんなわけで俺の記憶を持った俺は戦場にいる。いつのまにやら。

さっきまで冷蔵庫の中を漁っていた気もする。

俺はさっきまで俺だけだったような気もする。

俺は別に何も悪いことをしていない。ただ生まれただけ。こんな生きにくい世の中に、生まれてしまっただけ。

死ぬことができずに、生き続けている。

俺は俺自身を殺していく。

俺が生き残るために。

別に生きたいわけじゃない。

別に殺したいわけじゃない。

けれども引き金を引く。

物を食べるように。

息をするように。

俺は俺を殺す。

内角の和を 180° に戻すために。

初夢ポップコーンの振動

ヘリベマルヲ

どどどどど、そういや初夢ってさあ、えっなあに？ どどどどど、は・つ・ゆ・め。どどどどど聞こえなあい。どどどど前から気になってたけど初夢ってさ、どどどそれいま話さなきゃいけない話？ どどどどおれはポップコーン製造器のスイッチを切った。本年第一号の新作発明だ。なにとめてんのよばか、彼女はおれの手を叩いてスイッチを入れた。どどどどどスイッチを入れるのに手を叩く必要はない。どどどどどしぼみかけたコーンはふたたび爆ぜはじめた。それで初夢だけどさ、あれってどどどどどどうしてこんなに振動するのかわからない。どどど洗濯機を改造したのがいけなかったか。どどどそもそも脱水のたびにひどい騒音をたてる洗濯機だった。だからどどど廃物利用してもいいと考えたのだ。どどど実験が成功してどどど大量生産のあかつきには冷蔵庫をベースにしよう。それはともかくどどど初夢のどどど話だ。どどどどど。

今度は彼女がスイッチを切った。実験室は静まりかえった。この機械ちよつとうるさすぎるんじゃない？ たかがポップコーンつくるのに物々しすぎるし。ご近所迷惑よ。ていうかもう食べていいでしょ。扉をひらこうとする彼女の手をおれは払い、毅然とスイッチを入れなおした。まったくどどどどどいやしいやつだ、どどどどどどど。これはどどど普通のポップコーン製造器じゃないのさ。どどどどまあ見てなつて、世紀のどどどどど大発明だよ。ところでどどど初夢の話だけど、どどどどどど。

彼女は乱暴にコンセントを引き抜いた。実験室はまたも静まりかえった。断線するじゃないか、デリカシーのないやつだ。ポップコーンはもういいわ。こんなに待たされるんじゃ食べる気うせた。そうかいとおれは鼻を鳴らし、部屋を横切ってブラインドをあげた。充滿した香ばしい匂いは窓を開けるとたちまち薄れた。まったく女ってやつはせっかちで無粋だ。いついかなるときでもすぐさま食欲を満たせと要求する。このおれの崇高な発明意欲と比較して、いかに低俗であることか。

それで初夢がどうしたっていうの？ 忘れたよとおれは答えた。話す気が失せた、発明意欲とともにね。もう帰ってくれ。きみの顔なんか見たくない。なによそれ、と彼女はぶりぶり怒って部屋を出ていった。玄関のドアが叩きつけられるように締まり、ばたーん、実験室まで振動した。

窓から首をだして彼女が去るのを確かめた。そうしておれは製造器の扉をあけ、できたての香ばしいポップコーンを独り占めした。

れみんぐペンギンず

犬子蓮木

ペンギンたちが大行進している。

皇帝ペンギンとかタップペンギーとかイワトビペンギンとか特徴的な奴ではない。子供の頃、羽村動物園で見たような標準的でちびっこな奴らだ。

ここは学校の校庭みたい。奥のほうの体育館の前から校門まで六列並んだペンギンたちが、ニュースのデモ行進みたいに長い列をなしていた。

学校の屋上からみたら黒い大蛇がうねっているように見えるだろう。

周りには人間もいた。僕もその一人だった。大きなカメラをかついでいる人もいる。彼らはテレビ局の人間かもしれない。

僕はペンギンに大胆に近づいて、列を乱さないように近づきながら、かといってペンギンの感情などを気にせずに脇に手を突っ込んだ。

もふもふしている。

なんだか暖かい。

心臓の鼓動が手に伝わる。

僕のドキドキとした鼓動もなぜかよくわかる。

ペンギンはなにも抵抗せずただ行進していく。まるでぼくのことなんか気付かなかったみたいに。

僕もゆっくりとした足取りでペンギンと並んで歩いて行った。校庭を出てさらに進んで行く。歩道はペンギンで溢れていたの僕がガードレールの外を歩いた。

この行進は何が目的なんだろう。

いったい彼らはどこに向かっているんだろう。

なにもわからないけれど、ペンギンたちは楽しそうだった。カラフルな遊具のある公園の前を横切り、車通りの多い道路も我が物顔で縦断し、土手を越えて多摩川までやってきた。

川幅は大きく深いところもある。子供頃、ここで泳いではいけませんと言われていた。溺れて死んだ人だっているんだ。

ペンギンがいついき川に飛び込んだ。

僕は「あっ」と思った。もしかして彼らはここに自殺しにきたんじゃないかって。

だけど、違った。歩いてきたから忘れてしまったていたけど、彼らはペンギンだから泳げるのだ。集団で自殺するネズミとは違うのだった。

ペンギンたちは先頭の奴に続くようにしてどんどん飛び込んでいく。アルミのフライパンの上ではじけるポップコーンみたいに、ペンギンは岩から跳ねて川に次々に飛び込む。みなもが不規則に揺れてしびきが僕の顔にかかった。

お別れだ。

水飛沫は人間はこの先にはいけないと言っているように冷たい。服を脱いで精一杯泳げばいけるかもしれないけど、そんなことをする人間はいない。カメラを置いていっても意味がない人たちがいる。

さいごのペンギンが川に飛び込んだ。

僕はもうペンギンにさわることができなかった。

周りにいた人間達も「オツカレ」と笑いながら次々に帰って行く。
ペンギンたちは消えてしまった。
人間たちも消えてしまった。
空気の振動がおさまって、止まって、静かになって、この世界が死んだようにおとなしくなってしまった。
「嫌だ！」

僕はペンギンと一緒に川の向こう岸に行きたかったのに。行けるのに。僕が川に踏み込むと思った以上に深くてかんたんにおぼれてしまった。服にどんどん水を染みこんでいく。たすけてなんて声は水の中からは伝わらない。あばれもがく僕の視線の向こうにすいすい泳いでいくペンギンが見えた。
それが最後だった。

目を覚ますとそこはいつもの部屋だった。
新年からとてつもない夢を見てたような気がする。初夢は一富士二鷹三茄子が縁起がいいとか言うけど、ペンギンの行進はどうだろうか。正夢になるような内容でもない。
立ち上がって頭を振る。上着をはおってテレビをつけた。そしてろくな番組がない現状を確認してすぐ消した。

カーテンを開けると人間達が行進していた。自殺する集団？ 否、初詣に向かう人たちか。みんな楽しそうに着飾っている。

わたしはそんな人達とは違うのだとそのまま布団の上に寝っ転がった。
ペンギンはよかったなと思う。さわった感触はほんものではないが、悪いものではない。行進も思い出すだけでもおもしろい。

だけど、考えてみよう。
ペンギンには「前のものに続く」という習性があるらしい。
だから奴らは、なにも考えず生まれつきの習性に従って先頭が続いてただけで、それは慣習に従う人間の集団となんらかわりない。

そうだろ？
ペンギンにはぐれものはいないのだろうか。
そんな奴は、自然に淘汰されるのだろうか。
人間みたいに。
もしそうならば、と悲しくなってふたたび寝ることにした。
ひさしぶりに動物園にでも行ってみようかな。

<了>

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

一・富士、二・鷹、三・ポップコーン

司令@ヴァロ姐

ゴゴゴという地鳴りで私は目を覚ました。

すぐにやむかと呑気に構えて、布団でまどろんでいたら、その音と振動はどんどん強くなる。
何かと思ってテレビをつけてみれば、富士山が噴火するという。

私はずっとこのときを待っていた。

避難命令を飛ばすテレビを消して、私はフライパンと、中身が詰まって膨らんだ袋を持って、ペットの大鷹の上に飛び乗った。

非難するためではない、行き先は富士山だ。

鷹を操り、富士山の火口上空につく。

そこは赤々としたマグマが煮えたぎっていた。

私は魔法でフライパンを巨大化させ、富士山の火口を塞ぐ。

そして袋の中のものを、フライパンの中へとあけた。

同時に轟音を響かせて噴火する富士山。

ぽーんぽーんぽぽーん！

噴火の爆音に負けないくらいの破裂音が無数に弾ける。

フライパンの上で踊るのは大量のポップコーン。

そう、私は魔法のとうもろこしをフライパンに撒いたのだ。

火山のエネルギーはすべてポップコーンに代わり、富士山の噴火は収まる。

かくして日本の危機は救われた。

そして、フライパンから飛び出したポップコーンは日本中へ降り注ぐ。

シャボン玉のように弾けて消えて、そこに光を残す。

魔法のポップコーンは、みんなに幸せを届けて散っていく。



ジリリリリリ。

「何だ夢か」

そこで私は目を覚ます。

初夢が、一・富士、二・鷹、三・ポップコーン。

言い伝えからは外れたが、何だかよい一年になりそうな気がした。

《お題の使い方が素晴らしかったで賞》

スパイ

工藤伸一@ワサラー団

「了解」

今回のミッションで初夢が死んだことを伝えに来たポップコーンに、振動は真顔のまま答えた。

「奴はお前と同期だろ。他に言う事はないのか？」

「察してくれよ。ありすぎて何も言えないのさ」

「意外に良い奴なんだな」

「そうでもない。初夢を殺したのは俺だよ」

「もしかしてスパイなのか？」

「だったらどうする？」

「ここで殺し合うことになる」

言うや否やポップコーンの体は爆発して、中から飛び出した小さな白い凶器が四方八方から振動に襲いかかる。

しかし振動の体は小刻みに震えながら、いとも簡単に全ての攻撃を跳ね返す。

弾かれた凶器はポップコーンの本体に次々と突き刺さり、やがて本体は動かなくなった。

「ここまでがお前の初夢さ」

初夢が振動に向けて言う。

「なるほど。そうすると今おれは起きているのか？」

「とっくに死んでる」

「そんなことだろうと思ったよ」

かくして初夢は敵国のスパイだった振動を殺す事に成功した。

「やっぱりお前は強いな」

どこからかポップコーンがやってきて初夢に伝える。

「同期の中で常に一番だったのは振動の方さ」

「奴とは仲が良かったんだろ。よく殺せたな？」

「むしろ仲が良かったから殺せたんだ。安心している隙に夢を視させて」

「俺には通用しないぜ」

「わかってる。お前がスパイじゃないことを祈るよ」

「お互いさまだけどな」

「ああ」(了)

投稿時刻 : 2013.01.19 23:27

最終更新 : 2013.01.19 23:44

獲得☆ 3.125

おれはホモじゃない

忌川タツヤ

おれは YouTube が好きだ。動画サイトである。野球も好きだ。だからよく三振動画を観る。なかでも、松井秀喜の三振シーンがお気に入りである。あまりに好きすぎて勃起する。ごくたまに射精に至る時さえある。

おれはホモではない。いや、ホモを蔑視しているわけではない。ホモじゃないからホモではないと言っている。

動画鑑賞のお供はポップコーン。いつも近所のコンビニでまとめ買いする。105 円で売っているからだ。激安。デフレ万歳！

だが昨年に政権交代があった。返り咲いた自民党が「デフレ脱却」とか言ってやがる。たいへん迷惑な話である。

安倍晋三。第 96 代内閣総理大臣。

デフレの敵。すなわち、おれの敵である。105 円でポップコーンが買えなくなってしまう。とても困る。おれのおやつ代は、1 日 105 円までと決まっているからだ。

安部の野郎、おれの松井秀喜ライフを邪魔するつもりか。神聖なるおれの勃起ライフを！ 崇高なるおれの射精ライフを！ ををを！

安倍晋三め、どうしてやろうか。ふふふ。たっぷりのガソリン。ラムネの空き瓶。ふふふ。ボロ布。ふふふ。ライター。ふふふ。投擲。ふふふ。首相官邸。ふふふ。テロリズム。ふふふ。ポリリズム。ふふふ。パフューム。ふふふ。

「犯人がわかりました」

「え？ 誰ですか犯人は？」

「犯人は…わたしです」

「な、なんですって!？」

「という初夢をみました」

「…なるほど。初夢でしたか。で、真犯人はいったい誰なんです？」

「わかりません」

「わかりませんか」

「はい、わかりません」

「ならば仕方がないです」

「すみません」

「いえ、お気になさらずに」

「あ、こんな時間だ。事務所に帰りますね」

「わかりました。夜道、お気をつけて」

「そちらこそ、お気をつけて。では真犯人によろしくお伝えください」

「はい、伝えておきます」

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

「振動」「初夢」「ポップコーン」。お題はすべてクリアした。ここからは、おれの自由だ。自由世界だ。現在 22 時 55 分。ブラウザを起動する。Google Chrome。ちよろめ。エロサイトを閲覧する。XVIDEOS というサイトだ。<http://www.xvideos.com/>

なんか適当なキーワードをいれてみる。好きな言葉。そうだな…おれの好きなものといったら松井秀喜だ。それを検索窓に入力してみる。

No video match with this search.

英語だな。NO と Video しかわからん。翻訳サイトで機械的に訳してみよう。エキサイト翻訳にアクセスする。<http://www.excite.co.jp/world/>

翻訳した。「この探索を備えたビデオ・マッチはありません。」という意味らしい。XVIDEOS という海外エロサイトには松井秀喜関連のエロ動画はない、ということの意味している。なるほど。

ダメだ！ あきらめきれないッ！ 日本語がダメなのではないだろうか。だってメジャーリーグに在籍してたんぞ松井秀喜は。世界の松井秀喜といっても過言ではない。今度はローマ字で検索してみる。

「hideki matsui」で検索……ヒット有り！ 4 件の動画が表示された！

「kasumi matsui」の動画が 3 件。「Matsui Miyuki」の動画が 1 件。計 4 件。うむ。「kasumi matsui」つまり「まついかすみ」さんというわけだ。なるほど。

まついかすみ。おそらく、というか確実に AV 女優なわけだが、ひらがなで Google 検索してみると DMM.R18 というサイトに詳細な情報があつたので報告する。

正確には「松井かすみ」という名前のようだ。http://actress.dmm.co.jp/-/detail/=/actress_id=2545/このページの情報によると、過去に 42 作品に出演しているらしい。

リストの上から順に書いていくと、「淫乱パート奥様」まあ、いいだろう。「5 人の発情巨乳妻」これも、まあよくあるネーミングだ。「背徳愉悦近親相姦第八章」どんだけ続くの？ 「いま 23 時 11 分」もうそろそろ準備にとりかからねば。「人妻乱舞 3 時間」…なんだよ乱舞って。おまえは忍者か！ 「60 人の友達の母」なんか気持わるいな…。熟女は嫌いじゃないが、さすがに 60 人の熟女が一堂に会した場合、加齢臭やら何やらで気持ち悪くなって吐いちゃうと思う。(° ▽ °) オエー

まあとにかく、XVIDEOS という海外エロサイトで「松井秀喜」を検索すると「松井かすみ」さんが表示される。今回のことでわかったのは、おれは「松井かすみ」の動画をみても、ちっとも勃起しなかったということだ。松井秀喜の三振動画では勃起して、時には射精に至ることがあるにも関わらずだ。何度も言うが、おれはホモじゃない。ホモじゃないけれど、おれは松井秀喜で勃ってしまう。この世には科学では解明ができないこともある。

23 時 38 分。テレビをつけると「チューボーですよ！」が放映されている。ゲストは山本耕史。NHK 大河の「新選組！」で土方歳三を演じていた俳優だ。フジテレビの月 9 ドラマ「ひとつ屋根の下」にも出演し

ていた。共演者は江口洋介、福山雅治、そしてラリピーさん。大路恵美もいたなあ。剣客商売で田沼意次の隠し子役やってたよなあ。いま何やってるんだろう。

夢は空高くに

ジュニー

僕は激しい揺れで目を覚ました。
ベッドで半身を起すと僕は周りを見回した。
本棚やテレビ、机の上のノートパソコンに PS3 が激しく振動していた。

こ、これは地震だ！！
僕は慌ててベッドから飛び出すと自室のドアを開けた。

ドアを開けた僕は愕然とした。
そこには大平原が広がっていたからだ。
自室の揺れはさらに激しさを増していた。

僕は仕方なく大平原へと足を踏み出した。足の裏の草の感触がくすぐたかった。
後ろを振り返ると自室は完全に崩れ去っていた。

僕は果てしなく続く平原を歩き始めた。
父や母は大丈夫だろうか？
そんな心配をしながら平原を途方もなく歩く。
暖かい陽射しを浴び汗をかいた僕は上着を脱ぎ黙々と歩いた。

遙か先に大きな木が見えた。
僕はそれを目指し走り始めた。

木にどんどん近づいて行く。そして、その木陰に人が座っているのが見えた。
幼い少年のようだった。頭には野球帽をかぶっている。

僕は走るスピードを上げ少年に近づいた。
少年はポップコーンを食べながら、空を見つめていた。

少年は僕が近づいても空を凝視しながらポップコーンを食べるのを止めなかった。

「君はこんなところで何をしているの？」

僕は声をかけた。少年は答えない。

「ここは一体どこだい？」

僕はめげずに声をかける。

少年は空を見上げながらポップコーンを食べ続けた。やはり質問には答えてくれなかった。

僕は仕方なく少年の隣に腰を下ろし、一緒に空を見上げた。

10分ほど時間が経った。

少年はポップコーンを食べ終わったようだった。

そして、

野球帽を取り僕の方に振り向いた。

あっ！

驚きでおもわず声が出た。

少年の顔が幼い頃の僕とそっくりだったからだ。

「吃驚した」微笑みながら少年が言った。

「君は誰だい？」恐る恐る僕は訊く。

「僕は君、夢を持っていた頃の君」

少年はそう答えた。声のトーンが少し下がった気がした。

少し沈黙が続いた。

「僕は未来の僕に、君に、夢を諦めてもらいたくないんだ！！」

少年は真剣なまなざしで強い口調で僕に言った。

そうか、そう言うことか。

僕は上着を脱ぎTシャツになっていた僕の右腕を見た。

去年手術した右肘の傷跡がくっきりと残っていた。

昨年、僕は右肘を手術し『プロ野球選手』になるという夢を諦めた。

そう、

あの崩壊してしまった自室のように僕の夢は崩れ去ったのだ。

僕は幼い頃の僕の視線を強く見返して、

「諦めずに頑張るよ！！」と強く言い返した。

少年はニコッと微笑むとまた空を見上げはじめた。

僕も同じように空を見上げた。

*

ピッピッピッピッ・・・・・・・・

という目覚まし時計の電子音で僕は目を覚ました。

テレビも本棚も机の上のノート PC に PS3 もすべて何時も通りだった。

昨年、諦めた夢。

年が明け初めて見た初夢で僕は夢を取り返した。

僕はまだ 16 歳だ。

僕はベッドから起きると、ドアを開け廊下から玄関へ出た。

玄関の扉を開け、外に出る。

冷たい空気が僕の頬に当たった。

僕は空を見上げた。

幼い頃の僕と、少年と、見上げた空がそこにはあった。

<了>

キャラメル味

ウツミ

……夢を見ていた。

家族と三人、クリスマスの夜景の中を歩いている夢。

「ねえ、お母さん！あれ買おうよ！」

繋いだ手の温もりを引き寄せるように引っ張り、もう片方の手で行く手の屋台を指差す。

母は何も言わず、ただ優しい笑みを浮かべて、ぎゅっ、と手を握り返してきた。

そんな、何でもない事が嬉しくて、わたしの足取りは弾むように歩を刻む。

街はキラキラと輝き、わたしたちはまるで満天の星空の中を進むようだった。

「サンタさんには何をお願いしようかなあ……」

そう呟くと、父が複雑そうな表情を浮かべてわたしの髪をくしゃくしゃと掻きまわした。

「もう、やめてよお」

そう言いながらも、クスクスとわたしは笑っていた。

「ほらお父さん、お母さんに置いて行かれちゃうよ？」

少し先からこちらを見ている母を指差し、わたしは父の手を引っ張る。

しかし、ガクン、という振動と共にわたしの身体は止まる。

「……お父さん？」

父はしっかりとわたしの手を握り、動こうとしなかった。

「どうしたの？お母さん行っちゃうよ？」

そう言うと、父は軽く首を振った。

その意味は分からなかったが、わたしはなんとなく不安を覚えて振り返った。

その道のずっと先で、母が微かな笑みを浮かべて歩み去るところだった。

「お父さん、わたし、お母さんの所に行きたいの！ねえ、離して！」

父の手を振り解こうともがくが、びくともしない。

その先では、母の姿が見えなくなろうとしていた。

「行かないで！お母さん、お母さんっ……！！」

掴まれていない方の手を伸ばし、必死に母の方へと向かおうとするが、身体はちっとも前に進まない。

それでも、前へと進もうとして――

ゴンッ！

「……痛っ！！」

突然の衝撃で目が覚めた。

視界に映るのは天井と、ベッドからずり落ちた毛布、そして同じくベッドからずり落ちた私の身体。

それらがぼやけて見えるのは……なにも、床に頭を打ち付けたからだけではないだろう。

ベッド横に置かれたデジタル時計をチェックする。

『1月1日 6:24』

「はぁ……」

溜め息を一つ吐く。

「今年の初夢は、こんなのかぁ……」

にじみ出る思いを噛み殺して笑みを浮かべる。

覚えている。

あれは、今からもう随分前の出来事だ。

家族全員で笑い合えた、最後のクリスマス。

病気がちだった母は、あの日を境に容体が急変した。

あるいは、幼かった私が外出しようなんて言いたさなければそんな事にはならなかったのかもしれない。

あの日の寒さが母の体に悪影響を与えたというのは否定できないだろう。

――でも、それでも。

いつかは別れの時が来るといふのなら。

私はあの日家族で出掛けたことを、後悔せずに胸の内にしまっておこう。

あの日買って食べたポップコーンの味を忘れないように。

後悔の日としてではなく、幸せのページとして心に刻もう。

あの日母に買ってもらったキャラメル味のポップコーンは、苦かったのではなく、甘かったのだと。

「そういえば、結局あの時のお願い事は何だったっけね？」

もちろん、覚えている。

思い出して、クスリと笑う。

――わたしたちの思い出に、いっぱい幸せを。

劇団

たきてあまひか

いよいよ旗揚げ公演が明日に迫っていた。

「結成してから3年。公演にこぎつけるまで時間がかかったなあ」

「今年こそ、うまくいって信じてたけどね。俺は」

どうして？と聞くと、熱田はニカッといつもの笑顔を浮かべて、そりゃあ初夢でみたからね、と応えた。

「初夢は実現するって言うだろう」

どこまで本気で言っているのかわからない。だがこいつの、どこから来たのかわからない自信に引っ張られて俺たちがここまで来たのは間違いない。そして俺たちはどこかへとすすんでいくんだ。

「やれることはやったし、自信も有る」

「自信なんか無いよ。俺も、あと他の連中も、とにかく無我夢中でやってるだけだ」

「結成当時に比べたら、堂々としたもんじゃないか。成長したろ？当時の種田くんの演技と来たら見てられなかった」

「うっせ。初心者になにを求めてんだよ」

つい、思い返してしまった。自分たちで劇団を立ち上げると決めたばかりの頃のことを。

「しかしつけたときはこんなにぴったりくる名前とは思わなかったなあ、劇団名」

「そうかい？ぴったりだったろ」

「あんたの、その名前通りの熱気にあおられ、揺さぶられてようやく俺たちもはじけることができた」

「熱と振動を与えられて、カタイかたい頭もがはじけたってわけだ」

「そして、身軽になったよ」

そうだ。明日。劇団ポップコーンの初日が、始まるのだ。

ふわふわポコーン♪

やぐちけいこ

ポーンポーンポコーン♪
ふわふわふわわああん
ポーンポーンポコーン♪
ふわふわふわわああん

ここは雲の上。
空気は金色に輝き眩しいくらいにキラキラキラ。

小さな少女がふわふわの雲の上で幸せそうに目を細め座っている。
ふっくらとした頬を緩めふわふわと目の前で弾けてどんどん増える雲を眺めている。

ポーンポーンポコーン♪
ふわふわふわわああん
ポーンポーンポコーン♪
ふわふわふわわああん

小さな振動とともに弾け出るポップコーンのような雲がどんどん製造されていく。
白い出来たての雲は金色の光を弾きながら女の子を包んでいく。

きらきらきらにここにここ
どんどん自分を包んでいく光り輝く雲をそっと触れてみるとぷるるんと震える。
それが楽しくてさっきよりしっかりと触れてみる。
ぷるるんぷるるん

ポーンポーンポコーン♪
ふわふわふわわああん
ポーンポーンポコーン♪

ふわふわふわああん

小さな女の子の初夢はとても大きな幸せを運んでくるのかもしれない。

投稿時刻 : 2013.01.19 22:53

最終更新 : 2013.01.19 22:54

獲得☆ 2.688

《投稿一番乗りだったで賞》
大好きなのはあなたとユメと
ひやとい

初夢でいきなりゴキブリの集団に襲われる悪夢を見て、恐怖のあまり目を覚ました。まったく新年早々ろくなことがない。すっかり目が覚めたので、とりあえず起動していたままにしていたPCのメディアプレイヤーのリストにあった、電グルのポップコーンを聞いてコーヒーを飲む。もともと”popcorn”は、Gershon Kingsleyの曲なのだが、こっちはTR-808のせいなのかわからないが、ちょっと重く感じる。だが卓球の音作りは嫌いじゃないので、こっちを聞いている。目覚めの曲にはなかなかない。そんなことを思いながらタバコをつけぼんやりしていると、戸棚にポップコーンがあるのに気がついた。イスから立ち上がって取り出し、袋を開けさっそく頬張った。すると口の中でポップコーンがはじけだした。激しい振動だ。いてててて。思わず口を開けるとポップコーンたちが飛び出してきた。なんだなんだ！ 驚いていると彼らが言葉を発した。「やあぼくらポップコーンとポップロックのハーフ、ポップロックだよ！」「ぼくら口の中が窮屈でたまらないから、つい出たくて、震えて暴れてたんだ」「でも暴れるのにもけっこうエネルギーいるんだよね」「振動してて、ああしんど、ってか？」好き勝手なことを言い放つと、彼らはponponponとはじけながら、風に乗って空へ消えた。

無題

ひこ・ひこたろう

フリーのシステムエンジニアである僕は、とあるシステム案件の仕事で岡山にいた。出向先のビルの一階にはトマト銀行の支店があり、他の階にもインターネット専用の「ももたろう支店」があった。僕の仕事はかなり堅い業種の顧客向けのものであるため、そんな遊び心のある名称を羨ましく思わないでもなかった。

そのビルには毎朝、雑誌の配達をするおばさんが来ていた。雑誌の定期購読なら出版社と直接契約した方がいいのに、と思わないでもない。だって、岡山では雑誌の発売は東京よりも一日遅れなのである。出版社から送ってもらうと、東京での発売日と同じ日に届けられるのに。

今年の仕事初め、出向先の元請の会社の連中から、年賀状の書き直しを命じられて困惑する、というのが初夢だっただけに、僕は浮かない気分でそのビルに向かった。着くと雑誌の配達の人がいたのだが、自転車には見覚えがあっても、その日は乗っている人が違っていた。若い女性だ。しかも、可愛い。

横目で見ながら通り過ぎようとする、彼女が「あのう」と声をかけてきた。「ももたろう支店ってここですか？」と不安げに問う。「そうですよ」と僕は応える。「よかった……」と彼女は安堵の溜息。

一緒にエレベータに乗る。彼女は「ももたろう支店」のボタンを押したが、僕はつい自分の降りる階を押すのを忘れてしまっていた。「ももたろう支店」の階に着いた時、ようやくそれに気づいたが、時すでに遅し。彼女と一緒に降りた。

僕は彼女に向かって、「このビルの向かいのマンション工事の振動のこととか、君と一緒に映画に行って、ポップコーン

《無冠の帝王で賞》
ポップコーン・レッド
雨森

朝、眠い目を擦りテレビをつけるとまたいつもの報道だった。

それはまったく突然の事だった。

時や場所に関わりなく次々と人間が爆死する不可解な事件が日本を襲った。警察は特別捜査本部を置き、管轄の境を越えた捜査網を展開したが、この爆死事件が何者かの殺意によるものか或いは事故かの判断すら付かないという状況に国民の不満ははちきれんばかりだった。

テレビは警察の捜査状況に次いでショッキングな映像を浮かび上がらせる。僕は目を伏せたものの、いつものように映像へと視線を寄せる。

被害者と思われる人物のようだった。当然モザイクで隠してあるものの事件現場の跡は凄惨なものだった。赤黒い血の痕跡がべったりと残るアスファルトが爆発当時の無残な様子を想像させる。週刊誌による報道では、爆死した遺体はポップコーンのようだった、という。当初こ言葉の意味する所を僕は理解できなかった。

——この比喩が正しいという事を僕がまさに目の前で味わったのは2日ほど前の事だ。

出勤途中、僕が駅構内から外に出る際、たしかに悲鳴を聞いた。鼓膜を破らんばかりの物凄い悲鳴だった。

『やめて、やめて！』

そう聞こえた。改札口へ振り返ると若い会社員と思われる女性が自分の体を両腕で抱きながら床へ倒れこむ。駅員や連れと思われる男性が近寄ると、その女性は

『分かったから、本当にもう分かったから！』

そう叫んだあと、破裂した。肉と皮がひっくり返ったようなその様子は、まさにポップコーンだった。赤黒い血と灰色で艶やかな脳、ピンクの臓器にまみれたポップコーン。

事件は続いた。もう日本中で何人もの人間が爆死している。原因も『犯人』と呼べる存在さえも不確かなまま事件は繰り返されてゆく。

「それでも社会がちゃんと回り続けてるってのは、まるで奇跡だな」

そう、誰かが言った。

僕は今日も同じ駅で降りる。改札口の向こうは綺麗に掃除されて、血の一滴も落ちていない。まるでここでは誰も死にませんでしたと言わんばかりに、街は素知らぬ顔をしている。

『分かったから、本当にもう分かったから！』

あの女性はそう言っていた。記憶は時間を経るごとに曖昧になってゆくが、彼女が残した言葉は僕の胸に刻みついていた。

――あの人は何が『分かった』んだろう。

時々その事を真剣に考えるが、そんな事、僕の理解など及ぶはずがない。

その日もテレビはやかましく爆死事件を報道する。

警察の記者会見の生中継や遺族のコメントが流される。少しずつ僕自身も慣れてゆくのを覚える。当たり前になってゆく気がするのだ。すぐにも僕が爆発するかもしれないのに。

同居する弟は気楽なもので、そんなテレビ報道など気にも留めずに毎日けだるげに高校へゆく。皆がこうして鈍麻されていってしまう事を恐ろしく感じる。僕の方がおかしいのだろうか。それとも単純に僕達はあの女性のように『分かって』ていないだけなのだろうか。赤黒くポップコーンみたいに爆発するほど恐ろしい何かが僕達の背後にいる。

弟の僕は聞いてみたくなった。事件について、或いは僕達が『分かって』いない事について。

「――分かってる事なんてあるの？」

彼の答えはシンプルで僕を唖らせるものだった。弟も弟なりに悩みがあるのかもしれない。

次の日の日曜日、いつもより早く起きた僕は慌ただしく閉ざされるドアの音を聞いた。きっと弟だ。

昨日の弟の言葉に少しの心配を持った僕は弟の跡をつける事にした。いつ爆発してもおかしくないのなら、いっそう弟が気になる。

さいわい弟の通学は歩きなので尾行も楽だ。着替えを済ませて弟の姿を追ったが、余裕で追いついた。弟の通学路は往来の激しい中学校のグラウンドや大型家電店に面していて、弟はまっすぐに歩いている。僕は気づかれぬように歩く。

――ノイズが鼓膜を刺激した。どこかで聞き覚えのある音調だ。これは一体何だったか。その音は少しずつ私の記憶を裏返してゆく。

「分かった！分かったから！」

音は明確に声となった。あの爆死事件の被害者が発した言葉だ。まさかまた僕がそれを聞くのか。声の発生源を探すと『それ』は弟のすぐ近くで展開していた。ポップコーンのように。弟は裏返った『それ』が目に入らないように通りすぎてゆく。が心がふと血が溢れて歩道はすぐに血に染まった。弟はその血を一歩だけ踏んだが、省みる事はない。

僕は呆然と尾行を続けた。弟が通るたびにポップコーンは咲く。弟の近く、あるいは遥か遠くで。偶然だ、と僕は思った。犯人は弟なわけがない。考えてもみろ、事件は日本各地で起こっているのだ。弟はここ半年この町から離れた事もない、犯人じゃない。そもそも犯人がいるとも分かっていないのだ。

だが弟が一步踏みしめるたびに人がポップコーンになってゆく。なぜ？ そして、僕はどうして爆発しないんだ。

弟はとうとう高校にたどり着いた。僕は殆ど意識を失いそうになりながら彼の背中を追った。もう弟は僕の尾行に気づいている。

高校のグラウンドで待っていたのは何気ないサッカー部の練習風景だった。ジャージの着替えた弟はグラウンドを走っている。弟がグラウンドに入ってからポップコーンは一度として弾けなかった。どうしてかは分からない。『分かる』人は大抵弾けてしまった後なのかもしれない。さっきからしきりに手足が震えている。弟の心の振動が伝わっているからなのか。だが、そうならば、どうして僕はポップコーンにならないんだ。

僕は『分かって』いる。こうして、今『分かった』。なのに僕は弾け飛ばない。赤黒いポップコーンには

ならない。なぜだ！

弟が激しく息を切らしながら呆然と突っ立っている僕の前へ走ってくる。呼吸を整えようと鼻で息を大きく吸い込むと弟は言った。

「兄ちゃんには分からないよ。僕たちの振動は」

振動は伝わっている。伝わっているんだよ。

僕はそう声に出そうとして、出せなかった。分かっているなら僕は弾け飛ばなきゃいけないのだ。

僕はそのまま家に帰ると少しだけ、眠った。そしてまたテレビをつけると爆死事件の報道を見る。日本の各地、世界の各地で心やさしい『分かる』人たちは赤いポップコーンになっている。そのニュースを聞く。

僕は分からない。

終

投稿時刻 : 2013.01.20 01:34

最終更新 : 2013.01.20 02:44

獲得☆ 3.091

※制限時間後に投稿

Timeout

takadanobuyuki

「じゃあもういいです… こちらでなんとかします。」

『はあ、 よろしくおねがいします…』

という俺の返事が聞こえたかわからないうちに通話が切れた。

相手は明らかに怒っている。

睡眠不足な夢の中で気ぜわしく振動している携帯を取ると、
今日 10 時に打ち合わせを予定していた相手からだった。
切れた携帯の時計は 1 月 2 日、10 時 45 分。

「いなくていいの？」

携帯を持ったまま力なく枕に突っ伏した俺に、隣で寝ていた女が言う。

「2 日から打ち合わせとか、ないでしょふつー…」と、
同意を求めてみるが返事無し。

「…」

「…やっぱ行ったほうがいいかな」

「…そうね。。 …行くでしょ、やっぱ。」

「…よし！行くぜ！」

マンガの主人公みたいに飛び起き、今日の打ち合わせ相手に電話して、すぐにそちらに向かうのでしばらく待っていて欲しい旨を告げ、洗濯したばかりのパンツと黒のTシャツを着て、キレイめのジーンズとフードの付いたやや厚手のコートを着て、部屋を出ようとしたら急にハラが減った気がして、すぐ横の冷蔵庫の上にあったポップコーンの袋を見つけ

「ごめん、ハサミ取って？」と俺。

「あーちょっとまって…」と言ったあと、ハサミを持ってきてくれた女はポップコーンの袋をハサミで丁寧に開封する俺を見て「あっ、私のポップコーン！」

「ごめん、食べていい？」

「いいけど新しいの買ってきて」と言った女は少し呆れた顔をしながら、「そんな手で開ければいいじゃん」と付け加えた。

「やなんだよ」

「キレイに開けないと気が済まないの！」

と、女の呆れ顔にたたみかける俺に、

「はやく行けば？」と女。

右手に一握みしたポップコーンを食べながら、早足で商店街を渡り、駅の階段を一気に駆け上がってSuicaで改札を通りながら、電車の時刻を確認する。次の電車まであと7分。各停だと5分待ちだが、途中で急行に追い抜かれる。(こんな時こそ「急がばまわれ」…)などと適用にやや違和感を感じることをわざを思い浮かべつつ、改札内のコンビニに入ると、買ってきて、と言われたポップコーンがあった。

10袋くらい買っていったら文句ないだろw と思い

Suicaで支払を済ませると残り16円になった。

打ち合わせは新宿。

出るときに残高不足になるから、面倒だけど精算機を通らなければ、カバンの財布には5千円以上残っているはずだが、大遅刻の中の精算機ハンデは気持ちに重い。ポップコーン買わなければよかったかなーと思った瞬間に、スナック菓子を大量に持って、どう打ち合わせの席に行くよ？(しかも大幅遅刻のうえに)と呆然とする。

どうやらまだ寝ぼけていたみたいだ。。

でも、すぐ目の前にコインロッカーを見つけ、でかいほうのロッカーにポップコーン 10 個を押し込みポケットから 300 円出して鍵を閉め、駆け足で階段を降りて急行に乗った。

今日の打ち合わせは初めて顔を合わせる相手ではない。

が、それだけに油断していた。

面倒でもパソコンや携帯にスケジュールを入力しておくべきだった。

かなりへこみつつも、新宿の階段位置を考慮した車両まで移動する。

電車の中で受けたメールでは、駅を出て 5 分ちょっとのドトールで待っているようだ。

はじめて顔を合わせるライターさんも一緒という情報も付け加えられていて、かなり焦る。

いろんな言い訳のバリエーションと、

言い訳を許して貰えそうな空気の作り方を十分に検討するまもなく、新宿。

脳内シミュレーションした最短ルートを全力に近いスピードで駆け上り、

改札横の精算機に Suica を突っ込んだ後すぐに、カバンを忘れたことに気が付いた。

同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介

今回、「振動」「初夢」「ポップコーン」のお題で、Twitter 小説を書いてくださった方がいらしたので、Togetter にまとめページを作成いたしました。

第一回てきすとぼい杯のお題で **Twitter** 小説

<http://togetter.com/li/443579>

また、当日ご予定などで参加できなかった方が、後日、同じお題を使って作品を書いてくださいました。

「菓子枕」 長介

http://mukeikakusyobo.blogspot.jp/2013/01/blog-post_28.html

よろしければ、これらの作品もあわせてお楽しみください。

※他にもございましたらリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。

終わりに

今回、てきすとぼい杯、初回の開催であったにも関わらず、しかもたったの1時間+15分という制限時間つきにも関わらず、多くの素晴らしい、個性的な作品をお寄せいただきました。

お題の「振動」「初夢」「ポップコーン」については、難しい！鬼！……というご意見が多かったように思いますが、投稿された作品をご覧になってみて、いかがでしたでしょうか。

審査結果を振り返りましては、やはりお題もの、制限時間有りということで、小説としての完成度の高い作品、発想に意外性のある作品、お題の処理の仕方が優れている作品などに高い評価が集まったように思います。

……最後になりますが、こうして無事に第一回てきすとぼい杯を締めくくることができましたこと、投稿して下さった皆さま、審査・感想・チャットに参加して下さったすべての皆さまに、心からの感謝を。

てきすとぼい杯は、これからも毎月、中旬頃の土曜日に開催予定でありますので、お時間ご都合が合いましたらぜひ、ご参加くださいませ。

投稿だけでなく、審査・感想、感想チャット会だけのご参加もちろん、歓迎いたしております。

2013年1月31日
てきすとぼい杯 運営担当

てきすとぽい杯作品集
〈第1回〉

<http://p.booklog.jp/book/65264>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65264>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65264>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブックログ



てきすとほい杯